

此の雙幅に改裝したのでないか。用紙各葉の法量の區々なるは尙更是れを語ると共に、又それだけ右幅の上より第二第三紙の接合部の蘆葉に補筆の跡を見ることも肯はれる。斯くして現在の稍不可解な雙幅が出来上つたと思はれるが、而も尙遺品の乏しい此の畫人の作として珍蹟の一たるは動かし難い。(田中)

六、七 應舉筆寫生圖卷

京都 西村總左衛門氏藏

卷子裝 紙本着色	甲卷	豎三一・八寸	全長一〇米一四寸
	乙卷	豎四四・二寸	全長二米七八寸
	丙卷	豎最短二四・八寸	最長二七寸
		全長一米八一寸	

此寫生圖三卷の中、最長卷は豎約一尺横約一尺五寸の美濃紙二十三紙繼、假に甲卷とす。乙卷は豎約一尺五寸横約一尺の美濃紙九紙繼にて甲卷と同質同寸の紙を豎にしたものである。丙卷は豎最短約八寸、最長約九寸、横最短約六寸、最長約一尺五寸、紙質紙型寸法區々六紙五圖、この卷はもと諸家作品の貼込帖より摘出して最近改裝せるものと云ふ。

甲卷は主として四季の草木類を寫生せるものであるが、中に兎二圖、水禽一圖が介在してあり、辛卯(明和八年西紀一七七二)の干支記入のもの十四圖、干支を缺き月のみ記入のもの六圖、歲月共に缺くもの三圖よりなる。乙卷は甲卷同様に草木の寫生を主材とせるものであるが、中に唯一紙猿圖が介在してゐる。この猿圖と菜種圖とに庚寅(明和七年西紀一七七〇)の記入を見、特に猿圖には「寫應舉」と款記されてある。他に辛卯とあるもの五圖、壬辰(安永元年西紀一七七二)とあるもの一圖、全く歲月を缺くもの一圖よりなる。丙卷は五圖の中、白文方印「應舉」の捺印あるもの二圖、朱文方印「圓山氏圖書記」、同「圓山」、同「應舉」の三印を一處に鈐せるもの一圖ありて、年紀記入は何れの圖にも之を缺いてゐる。

斯く記入せる干支によりて、この寫生圖卷は明和七庚寅年即ち應舉三十八歳、明和八辛卯年即ち應舉三十九歳、安永元壬辰年、即ち應舉四十歳の前後三年間に大體筆作したものと推定される。この期間は彼が圓滿院法主祐常親王の眷顧

を蒙りて、宋元の畫蹟を研究したと傳へられる所謂應舉の圓滿院時代に相當する。彼が仙嶺の號を捨て、應舉と號し、彼の畫道の根幹たる寫生によつて、本格的の製作に没頭して行つたのも恰度この圓滿院時代である。その史實を裏書するものと考ても、この寫生圖三卷の有する興味は實に應舉が畫道研鑽に就て平常いかに刻勵せるかを窺ふに最も好適な資料たるに止らない。

緒てこの寫生圖卷は應舉が自然物を克明に寫生せる畫稿であると云つてしまへばそれまで、何等説明を要しないが、よく見れば自然のまゝのものゝ姿を描寫するに、いかばかり行届いた手法を用ゐてゐるか判る。その描寫法は一律でなく、主材の種類と共に萬様である。例へば朽葉や竹葉などを寫すに鉤勒の細線を用ゐて、かさ／＼とした質の感じ、觸れ／＼切れる鋭い感じまでも表出してゐる。また嫩葉や菅の水くさを寫すに、それら草木のもつ、ふつくりとした柔い特性を沒骨體の筆に托して、宛に表はしてゐる。また椿や躑躅などの花卉や桂や白膠木の紅葉、さては秋海棠の枯葉などの彩色には、隈取や滲込など複雑なる手法を用ゐて、その鮮やかな色どりを手に取る如く寫し得てゐる。尙黒と白との兎を寫すに、外隈と墨描のみの筆觸で毛並の中の溫もりさへも表はしてゐる。如斯、應物隨類の寫生に於て、その對象に最も適した技法を以て、驚くべき筆の冴を示しつゝ形のみでなく、内にこもる生命に迄觸れて物象の内面の眞を寫し得てゐるは、その畫技の非凡を證するものである。

圖卷中、精采に富む諸圖は、すべて應舉が虚心恒懷、清新な感覺をもつて、直接自然に則り、自然そのものゝ姿を如實に表現したものであるが、中には覺書によつて知らるゝ、甲卷にある鴨及び草蓴蓉や乙卷にある松葉類の如き、直接寫生せる原圖を基本として、この卷中に淨寫せるものかと思はれる圖も混じてゐる。尙よく見れば甲卷中にある山査子の實の如き、丙卷の過半の如きも亦淨寫せる圖なるか、或は全く他者の手になれる摸寫圖の介在せるかと疑へば疑へる程の畫格の劣る圖も混じてゐる。

されど、就中、甲乙兩圖卷の大半こそは、彼が直接自然觀照の成果になるものとして、圓山派の始祖寫生畫家應舉の眞面目を窺ふに足るものと云へやう。

尙この寫生圖三卷に收められてある全品目を、各卷首より展舒の順に列擧すれば左の通りである。

甲卷

一、晚秋果實各種金柑干時十一月中寫之とあり。二、落葉各種辛卯霜月中寫、タラヤウ墨黄大赭墨斑などとあり。三、紅葉各種辛卯十月中寫落(紅)葉、柿土具朱曲斑付などとあり。四、熊笹、青木等辛卯仲冬寫、クマサ、などとあり。五、椿花各種辛卯季春寫、ワビスケ白斑有などとあり。六、嫩葉各種辛卯季春、楓嫩六エンシ付立などとあり(沒骨)。七、サンザシ雲菌九月中南都三笠山産などとあり。八、秋海棠辛卯八月末寫、裏葉甚白ミ有とあり(沒骨)。九、松、ムロ、小篠等右十二月初寫などとあり。一〇、白兔、鼠子 目朱墨ノ具エンシ墨曲とあり(外隈)。一一、黒兎覺書なし(外隈)。一二、鴨辛卯五月廿三日寫、同年十一月再寫、風切不見飼鳥故歟などとあり。一三、躑躅各種辛卯季春寫ツ、シ、大キリ鳥藤色具同曲などとあり。一四、皐月辛卯孟夏末寫サツキ之類とあり。一五、蕨、虎杖辛卯季春寫、老綠草具朱墨付立同毛有などとあり(沒骨)。一六、山茶花十一月中寫、花縮有縮ノ外ト紅内ハ白也などとあり。一七、竹葉 苦淡笹二品辛卯霜月寫などとあり。一八、常緑樹十二月初寫、檜、ユス、ビシヤ、キ、ウスカなどとあり(沒骨)。一九、鬼狗背辛卯季春、草葉エンシ付立などとあり(沒骨)。二〇、仙臺萩、蘆類辛卯季春寫、スゲ水上薄草綠、水中シ黄白具少シ赤ミなどとあり(鈎勒、沒骨併用)。二一、柳辛卯季春寫、葉草綠付立、裏白粉付立、木墨描嫩綠掛とあり(沒骨)。二二、水仙、黃梅連翹等六、キコル、丹、シ黄ダなどとあり(沒骨)。二三、唐萱草花 五月初、草蓰蓉、四月中見之同年十二月寫之、ナンバンキセルなどとあり。○描法を付記せざるものはすべて鈎勒體である。以下做之。

乙卷

一、笥壬辰五月十一日寫、笹ノ露五月中、螢二品五月十日寫などとあり。二、猿明和庚寅仲春寫應舉、三才、惣身淡墨具淡墨毛黄コル掛目作土耳肉色などとあり。三、良姜辛卯仲冬中寫などとあり。四、松葉類五葉松辛卯霜月、雄(男)松十二月初寫などとあり。(沒骨。註記、此圖は十二月初寫とある雄松を最初に描き、霜月五葉とある五葉松をその後に描いて居る。)五、薄辛卯九月初寫カルカヤ歟、未出、小出、盛、老などとあり(沒骨)。六、荻花、花薄辛卯九月初寫二枚之内、總夏土用中ヨリ出、などとあり(沒骨)。七、花薄辛卯九月初寫、小出、半出、小盛、誤太シ枝與同などとあり(沒骨)。八、菜種鼠麴草庚寅夏四月中寫などとあり(沒骨及鈎勒)。九、水草類フト蘭、菖蒲、若葉シノキ有テ如釵、杜若若葉などとあり(沒骨)。

丙卷

一、山鳥目ノ内フチヨリスミクマ、尾皆此通尾ノハバ六口などとあり。二、鳥朱文方印「圓山氏圖書記」同「圓山」同「應舉」三、虎耳草 三月始寫紅蔓ヲ葉ノ間ヨリ抱テ出ルなどとあり、白文方印「應舉」。四、筍草白六具ニ黄ミ在、先土具などとあり、白文方印「應舉」(沒骨及一部鈎勒)。五、子熊覺書なし。

因に、甲卷の見返に「曾祖父應舉眞蹟、圓山應立識藏、『應立』印二顆」とあり、同紙背に「圓山主水應舉筆寫生集畫二卷之内」と記し、又同處貼付の別紙に「上京廿五番組姉小路區兩替町西入柿之本町士族圓山應立所持」と誌されてゐる。又同箱書「圓山應舉先生眞蹟^{各物寫生粉本}」と書かれてゐる。乙卷の見返には甲卷と同一の鑑藏印記があり、卷末に「以上九紙明治壬申三月『應立』印二顆」と誌されてゐる。丙卷は既記の如く最近の改裝にて、鑑藏印記等を缺いてゐる。(菅沼)

應舉筆寫生圖卷（甲卷之內）

京都 西村總左衛門氏藏

應舉筆寫生圖卷（上、甲卷之內、下、乙卷之內）

京都 西村總左衛門氏藏